第三過現未

軍営の秋の夜（上杉謙信氏の詩を意譯せ）

鋒とりて顧みれば
霜白く軍営満ちて
天高く風寒し

天理大
A173
3

雁数行空を過れば
声遥に山坡に流て
月清く夜静なり

越の山能登の果
今ぞ合せて我領とせんも
面白し男児の業

さるのらばれ今宵の月みん
遠征の人を思ふらん

ふる郷人のつかもつバ

関東の大野

山巓に駒をとゞめて
暮れ行く雲をあぐれバ
義なるかな関東の大野
雲ハ天に満て
銀ハ流れて秋水に入る
榛の山 赤蘿の山 嶽

途霞一沫八洲を籠て
天高く月冴て
風寒く霜白し

二

八洲の地の時よ、
我は光の板東武者
世は光の板東武者
皆光の板東武者
豆此地に生長せし
馬鞍を家、弓矢を友

八洲の地を馬蹄のあけて
猪とあり熊を手はなれる
猛武者の板東武者
豆皆の世の見孫なりしよ
思つゝ恋しきよ
世は今も尚記憶れる歌
道とせよ駒をとゞめて
桜を咏じ八番の句を
世人今も尚記憶れる歌
騎る平家を西海の

陸奥守源頼朝官を
彼方なる関東にとて
其故何とハしらねども
見る人毎に武を尊ぶ如く
傳へ聞く人毎に武を尊ぶを
一騎の義と覚えつる
秩父、熊谷、三浦、和田、畠山、
梁田、篠塚、
此関東を故郷とせんとて
其身の義としらばや

嗚呼関東元是武を用ゐるの地
馬に壯なる人多く
天下を敵し、地なりしを
変れば変はる世とて
人の心の今昔
何ぞ
動かぬ所なりける人と
慨歎として天を仰げば
日輪天にあり
風蕭々千里よりきる

鞭を揮て山を降れば
森の木の間の月の影ハ
馬上に躍る我影を
照して寂し夜の山道
笠の巣、梢の猿猴
声も哀に袂ふけて
思ふ餘る故郷の空
旅宿のつとや偲ひらん

四

一死に山を降り

一死に笠を降れば
前ハ茫々たる八重の草莽
尾花ハ枯て露冷かに
秋衣を掛る秋の月
蕭々として水寒し

五

面白や明月小鞭を挙れば
西を指す岩屋の
地を踏なら鳴の音
ほんぽかつと木精して

一隅寂し夜の旅

見上る馬上の影の尾花の穂しく
蹄のあとに[illegible]
折れつ倒れつ露散るを

六

駒の歩ハそも何処ゆく
駒は疲れて花せば
野風ハ来て鬣を梳る
ふりさけ見れば今来し山の
霧ふかくくれて見えかね

前途ハ遠し関東の大野
草花々
なけども
月一輪
哀れ広野の果ハ何処ぞ。

七

恋ふ虫の声も哀ふ
秋の夜ふけて風寒く
今宵他郷を独り思ふ
見上る人ハ孤影を思ひ
月ハ孤輪ながめて人をとゝろ

天上の月　馬上の影
相照し相想ひて千里をめぐ

和四　恋無常

山里わ世を遁れて
花の都かれつ塵を
避てかくて山里の
伏見の郭の月清し
心の垢の煩悩を
目の雫のさやけきみ
池へバ清し我思
功名富貴世の中の

人の望を一睡の
夢と悔して世を忍ぶ
涙の痕を誰か知る

鳴呼天の望の星を落て
五丈原の英雄恨の
地上の花の散て歌
港に還る桂川
神の秘密は人知らぬ

荒玉の花も散りぬ
千年の秋や落ん

秋

浅間の森の夜嵐よ
何を怒りて呼びなく
梢の木の間の夕月よ
何を憂へて暮れ初き
塵の海世を棄し男ぞ

卅五　旅路

春のながば浪駿河の国田子の浦みて

白帆霞む海の景色かり富士の山

秋のもふべし七里が濱を過ける時月影

の西の空て海の色ひとしきはおどろ〳〵し

うすえけれバ

月落て秋果てぬ海の音

夏の初江の嶋を過ける時、片瀬みて俄

て

雨降り遇ひつゝ、ふと西行見返の松を思ひ出

見渡りの松へ何処ぞ村時雨

冬の陸成田より左倉宗吉の社へ詣ける

途、刀寧河の畔まで よめる

と取の川初ひ手の風をはらませて

白帆の影のはしりゆく見ゆ

和六 雑詠

京美人

春山

春山ぼのゝ霞たなびくその朝

流も清き加茂川の

水で洗ひし羽二重の

肌膚をぐしき京美人

茶屋が軒みの緑の端

柱よりとられたよ人ばり

明めく空を眺める

梅の雪の肌解けて
梅が香うつる襟の艶
ふと涙の目みはるる
眉のあたりの八月くもる
夢を悲しむ梨花一枝
髪のたつれは泥が翠ぞ

ふつべの四苦のむすばれて
思ひみすやむ今朝なる恋
其うつり香ゆかぬ

恋情に合れの後朝恋
故に泣き恋故笑ふ
恋と命の京義人
空を見暮しの間の中ゐ
我よりみけり恋命

のとやさきに
雪の袖まつをる八撥の花
匂ひ
袖ふれし泥を
花の無
忘れ
泥つど落ぬ

曙の月ハさゝぬと
ふりくる雨も
日本堤のもふ
けく白浪つも
行と知けし
雷を乱ふかや
剣の光のとぬさき

後朝

山の端の白む
ひいやよ経の鐘

秋の夜長ヵぬしよ遇ふ
夢の間あ
契みぢかきうき分れ
つゝる泥もなのるものを
何を蓮地とる虫名の声